

未満児保育の現状と課題

—— 実践報告をきいて ——

天 田 邦 子

乳児からの未満児保育に対する社会的要請は、年々増加し、公立・私立を問わず、保育所に入所する児童数が増えてきた。未満児の保育所入所児童数の推移を、昭和30年と昭和55年の全国統計でおえば、次のとおりである。0歳児は551名から18,697名へ、1歳児は、2,121名から84,697名へ、2歳児は14,585名から195,845名へと、急増している（全国保育協議会編『保育年報』1982年版、厚生省の社会福祉施設調査報告による資料）。いうまでもなく、未満児保育の拡充は、働く婦人の増加や家族構成の変容などの社会的背景のもとでなされてきたものである。

ところで、乳児からの保育所保育をめぐるのは、近年いくつかの実践報告や、研究成果が出されつつあるが、乳児に対する保育観や、乳児保育に対するいくつかの危惧に関して、必ずしも十分に解明されているとはいえない。ただ、現実の社会的必要性に対応する家庭外保育の充実をめざす努力や、保育所における保育環境、保育内容、保育方法などの実践的蓄積と深まりが、求められていることは確かである。

長野大橋保育園の坂口サトミさん、野池博子さんの報告は、未満児保育とくに乳児保育の具体的な日常的保育実践のなかから、基本的な諸問題を提起したもので、たいへん今日的意義をもつものであった。

保育所の保育内容に関しては、児童福祉法、児童福祉法施行規則などにおいて、健康状態の観察、個別検査、自由遊び、午睡、健康診断の5つがあげられている。また、昭和40年に厚生省児童家庭局長通知として発表された「保育所保育指針」および続いて出た全国社会福祉協議会の「保育所保育要領」にも保育内容の領域が示されている。いま、「保育所保育指針」から、未満児の各年齢の「保育のねらい」を摘記すれば、次のとおりである。

一歳3ヶ月未満児の保育は、保健的で安全な環境の中で個人差に留意しながら、離乳の完成、歩行の開始とことばの発生を助けることをおもなねらいとする。

一歳3カ月から2歳までの子どもの保育は、特に保健的で安全な環境の中で、保母との個人的なふれあいに配慮しながら、歩行の完成といろいろな運動の発達を助け、自発的に周囲の事物を知ろうとする力の芽ばえを養い、ことばの習得を助け、友だちへの関心を助けることをおもなねらいとする。

2歳児の保育は、自由に活動できる環境を用意して運動機能を伸ばし、自分でしようとする気持ちをたいせつにしながら模倣活動と言語活動を促し、また、まわりの環境や友だちとの関連を広げて表現活動の芽ばえを育てることをおもなねらいとする。

3歳児の保育は、保母の養護と個々の子どもの要求をたいせつにしながら基本的な習慣の自立を図り、集団生活への適応の初歩を経験させ、また遊びを通して生活経験の拡大と創造の芽ばえを育てることをおもなねらいとする。

さらに、各発達段階の望ましい活動や、指導上の留意事項が、あげられているが、それらをどう解釈するのか、どう具体的にとり入れるのかは、各園の方針や保育者の主体的実践のしかたに、ゆだねられている。

長野大橋保育園のふたりの先生の報告は、日々の総合的な保育指導のなかから、①乳児の入所時の母乳からミルクへの移行、および離乳食の摂取、②排泄の自立、③社会性と言語、④生活習慣、⑤健康、の5つの点を中心としたもので、詳細は前出の報告書のとおりである。報告に対しては、分科会参加者から、活発な質疑、意見が出たが、その多くは、乳児のミルクの回数、睡眠時間帯、給食・おやつ、長時間保育や土曜日などの職員勤務体制、家庭との連絡簿、などにみられるように、具体的なやり方に関するものであった。参加者も、未満児保育に従事した経験者が多く、有意義な情報と意見の交換がおこなわれた。報告やその後の討議から、感じたことを二・三指摘したい。

第一は、子どもの年齢が低いほど、いかに個別的な扱いが必要となるかという点である。長野大橋保育園では、保育方針のなかに「個人差をしっかりと把握し、ひとりひとりの心身の成長、発達を具体的につかみ、そしてその子に合った環境作りと働きかけをする」と掲げているが、それがミルクや離乳食への移行、排泄の自立へのステップなどで、具体的に配慮されていた。年齢が低ければ低いほど子どもの欲求、生理的および精神的 능력には、かなりの個人差がある。授乳の時刻をひとつとっても、画一的にきめるわけにはいかず、それぞれの子どもの生理的特性に即応させなければならない。基本的生活習慣を身につけさせるばあいも、手を洗う、歯をみがく、排泄させるなど、一斉集団的な指導のみでは、無理である。また、子どもを個別的に扱うということの意味は、先生と子どもとの個人的なふれあいも必要とされるということである。年齢が低い場合、やさしく声をかけてあげる、笑顔で相手になってあげる、先生の身体にふれるなどの交流によって、かけがえのないそして保育の基礎ともなる安心感、安定感が与えられるようである。乳児や新入所児に対しては、とくに個別的配慮による情緒や心理の安定、いいかえれば、保育所が子どもにとって居心地のよい自分の生活する場となることが、まず必要かと思われる。

第二に、それとは一見逆のような仲間集団そのもののもつ教育的役割が、やがて出てくるということである。保母や大人に多くを依存しながらも、乳児の段階から子どもどうしの社会的交渉がはじまり、そのなかで育ちあうようすが、うかがえた。食事や睡眠、排泄、着脱衣、清潔の習慣など乳幼児の基本的生活習慣の形成が、家庭よりも保育所で一步先んじて確立してくる傾向がみられた。これは、仲間と一緒にそれらの行為を遂行する過程を通して、お互いがモデルになって学習し合い、みんなであるという共通の雰囲気を作り出し、互いに育ちあう場面が多いことによるのであろう。このことと関連して、社会性の報告のなかで、グループ対立からクラスのまとまりへのダイナミックス、年長者と年少者の交流、けんかの場面などの指導について事例がとりあげられていた。集団保育は、社会性を培うといわれる。社会性は、子どものひとりひとりの独自性を十分あらわし、満たしていくことと、他の人たちと調和し流動的な関係を保てる、という二つの面から考えられよう。

第三に、排泄の自立の報告にあらわれたような、子どもの発達を総合的にみる視点

の大切さである。排泄のしつけは、不随意に行なわれていた排泄行為を、脳のはたきで随意的に、意志によってさせるよう訓練することであるから、子どもなりのかなり強い自分へのコントロールが必要となる。したがってオムツがとれることは、脳などの精神的発達や、中腰の姿勢が保てるような運動能力の発達、情緒的安定などが、そろってはじめて可能になるのである。保育実践のなかでは、何人かのしつけの経験上、「お兄ちゃんらしさや自己主張が出てきた、精神的に安定してきた、80cmのすべり台からとびおりられるぐらい運動面の発達がみられる」と、急にオムツがとれたと、表現している。この表現のなかには、しつけをしながら、子どものひとりひとりの発達を、全体的に把握しようとする保育者の姿勢がでているし、それが現実の子どもの発達のすじ道になっている。

未満児の保育をとりあげても、数多くの問題が、さらに掘りさげられなければならない現状である。長野大橋保育園のような地道な実践的研究の今後の進展を、期待したい。